土曜 ライフ・楽しむ

わたし色

冬到来 懐かしい父の特注ストーブ

生活情報誌「悠悠と。」
編集長・真鍋康利

いよいよ冬の到来。暑くてヒイヒイ言っていたのがつい昨日のことのようですが、また厳しい寒さの日々がやってきます。今年は初氷も初雪も記録的な遅さとのこと、これも温暖化の影響でしょうか。

最近読んだ小檜山博さんの「寒がり癖」というエッセーに、部屋中を暖めなければ気のすまない滝上生まれの小檜山さんと、暖房はこたつだけという長野生まれの奥様の、ストーブを「つけよう」「つけない」という闘いの日々が興味深く描かれています。

無類の寒がりであるご自分を「寒がり癖」と判じておられる様子を、大変面白く読みました。そしてすでに鬼籍に入った大阪の両親を思い出しました。

○○○

北陸生まれの父も寒がりで、これでもかというほどストーブを焚きます。家業は材木屋で、大量に出るおがくずは近所のお風呂屋さんが定期的に引き取りに来ますが、木っ端が山ほど残ります。

仕事柄親しくしていた北海道の取引先に頼んで北国仕様のストーブを入手し、木っ端を燃料にして一日中焚きます。すると火力が強すぎるためかひと冬で使い物にならなくなり、毎年送ってもらうことになります。

5年ほどして我慢できなくなり、父は自分で図面をひいた特別仕立てのストーブを鉄工所に作ってもらいました。分厚い鉄板で作られ外観はシンプルですが、空気の調整などに工夫が施され、とにかくよく燃えるのです。

鉄板が真っ赤になるほどゴオゴオと音を立てて燃えるので、訪れた人が「この勢いなら車輪をつけたら走りだしそうだな」と言ったほどです。

逆に九州生まれの母は暑がりで、室温の高い父の事務所には入りたがりません。夏はゴザを片手に少しでも涼しい場所を探して家の中をさまよっていました。今はかの地で「寒い」「暑い」と言い合っているかもしれません。

○○○

北海道に来た当初、寒いと言ってストーブをつけ、暖まってきたら暑いと言ってすぐに消す姿を見て、「北国の人は我慢が足りないなあ」と思ったものです。と言いながら、今では同じように、火をつけ、火を消すようになったので、やっと北海道人になれたような気もします。

暖かい居間から寒い寝所に行き布団にもぐりこんだとき、かい巻きがうれしかったのが懐かしい。窓の気密性が高く、床暖房もあり、どの部屋も暖かい今を父にも経験させたかったなあ。

寒い日にはエッセーにある小檜山さんお薦めの暖房法、いわゆる「酒暖房」で私も体の中から暖めたいと思いますが、さて今年はどんな冬になるでしょうか。